

近現代建築資料を対象とした 実践的整理法の発展プロセスに関する研究

—英国 RIBA の図面コレクション目録を完成させたジル・リバーの北米での活動—

齋藤歩^{※1}

概要 建築図面の整理法について、英米における発展プロセスの一端を明らかにした。研究方法として、王立英国建築家協会 RIBA で図面コレクションを網羅した全 20 巻の目録を 1969 年から約 20 年間で完成させたジル・リバーの活動に注目して、文献を現地調査した。リバーは、1978 年に建築図面目録の調査を目的に訪米して、1980 年代には米国における図面目録の標準検討会議 ADAG に参加したことが知られている。英米に残されたアーカイブズを分析して、リバーの専門性や北米での経験が RIBA 目録に与えた影響を考察した。

1. 研究の背景と目的

日本で建築資料は、1980 年代中頃より建築図面の所在調査が実施されて、2000 年以降は「アーカイブ」と呼ばれて図面以外にも対象を広げながら、建築史の研究素材とされてきた。近年では 2013 年に文化庁国立近現代建築資料館 (National Archives of Modern Architecture) が開館する等、アーカイブズとしての記録の永久保存について世間も関心を高めている。こうした動きにあわせて 2000 年前後から、日本の建築史研究者らが各国のアーカイブズ機関を訪問調査して整理法を検討してきたが、実践的な整理法は定着しないまま今に至る。

こうした日本の試みは、おもに建築学の範疇であった。そのため、アーキビストらが持つ実務上の現場感、あるいは他領域の研究が顧みられないまま、目録の体裁だけが形式的に導入されてきた。そこで本研究では、英米の代表的な機関を分析して、整理法の発展プロセスの一端を明らかにする。そのことで日本の試みを再評価して、アーカイブズの考え方について理解促進を図る。

2. 研究の対象と方法

2-1. 対象

日本では、「建築資料」や「建築アーカイブ」が十把一絡げに認識されてきたところがあるが、国際的な研究と実践では、「建築図面 Architectural Drawings」「建築レコード Architectural Records」等の用語を定義して、考え方を区別している。前者は図書館学、後者はアーカイブズ学に概ね基づき、整理法が別々に検討されてきた。

建築図面は、対象を絞っているだけ考え方を理解しやすく、目録構成も単純である。京都工芸繊維大学や金沢工業大学といった日本の教育機関での実践は、この系譜に位置づけられる。ただし、整理法の考え方については学術的な研究が十分に展開されないまま、実践が先行してきた。建築レコードは、対象を限定せず、建築生産で作成されるあらゆる記録を包括する。これまで報告者は、建築レコードを対象とした整理法について、研究と実践とに取り組んできた。

本研究では、建築レコードを集合として扱うアーカイブズの考え方と対比させるかたちで、建築図面の目録を分析対象とする。

※1 京都大学総合博物館（研究資源アーカイブ系） 特定助教

2-2. 方法

まず、建築図面コレクションが世界有数の規模と伝統を誇る王立英国建築家協会（RIBA）で1960年代末に確立した図面の整理法について、目録形式に注目して調査する。次に、目録が印刷版から電子版へ移行した1980年代におけるRIBAの動向を調査する。いずれも、RIBAで目録作成のキーパーソンとして活躍したジル・リバー（Jill Lever, 1935–2017）に注目する。

(1) **公刊図書の調査**：公刊図書により確認できるリバーの特徴的な活動は、RIBAでの1969年以降の目録作成、米国ナショナル・ギャラリー・オブ・アート（NGA）が1983年に設置した建築図面アドバイザー・グループ（Architectural Drawings Advisory Group, ADAG）への参加である。その間にウィンストン・チャーチル記念財団の研究助成を受けて、1978年に訪米したことも知られている。訪問先は17機関と報告されたが、把握できる訪問先は、ニューヨーク近代美術館、フランク・ロイド・ライト財団等の約半数に留まる。

(2) **アーカイブズの調査**：公刊図書では、RIBA目録、北米調査、ADAGの相互関係は不明であり、米国で得た知識を英国においてどう発展させて目録を更新したのか、そのプロセスを知ることが難しい。そこで、本研究では英米のアーカイブズを参照する。

(3) **考察**：アーカイブズにより、目録作成の背景やADAGでの発言や役割を把握することで、RIBAにおける整理法の発展プロセスについて新たな一面を明らかにする。建築図面の整理法について理解が進めば、相対的に建築レコードの整理法の特徴も明確になる。報告者が取り組んできた建築レコードの研究と対比させて本研究の成果をまとめることで、記録タイプを限定せず建築生産の全体像を集合的に把握する方法と、図面に特化して資料一点別に注目する方法

との、少なくとも二つの整理法が選択可能となり、日本の建築分野において記録を保存するための基盤は、より堅牢となる。

3. 研究成果

アーカイブズの調査考察により、おもに二つの成果を得た。調査に関係して、1978年の助成団体とジョン・ソーンズ美術館（リバーがRIBAの後に勤務）には記録が残されていないことも確認した。

3-1. ジル・リバーの活動

RIBA所蔵の「Jill Lever's historical research papers, ca. 1980–1985」を2022年10月26日と27日に閲覧した。総量10箱で、箱1から箱9はリバーが担当した展示の記録、箱10は図面コレクションのキュレーターが公募された際の応募関係書類である。箱10のフォルダ8に含まれる資料によれば、公募は1986年10月24日締切、募集要項では、電子目録による国際的なアクセスが1987年1月から可能となるため、情報サービスの充実が最優先業務とされた。

履歴書の控えには、リバーの経歴が記されている。リバーが10代で初めて務めたのはブライトンの図書館であり、20代前半にライブラリー・スクールで学んだ後、1959年にRIBA図書館に雇用された。RIBAでの業務は定期刊行物の索引づくり等であった。その後、設計事務所HKPAで司書を務め、古物商を営むベンジャミン・ワインレブ（Benjamin Weinreb, 1912–1999）のもとでは建築書や建築図面の目録作成を経験し、1968年から再びRIBAで勤務して図面コレクションの目録作成を担当した。1969年までは非常勤であったが、1970年に図面コレクション補佐キュレーターとなった。RIBAで1995年まで勤務しながら、オープン大学で学士（BA）を取得した。

海外での活動に関する記載もある。1978年の北米調査をはじめ、1982年にパリで開

催された国際建築博物館連合 (ICAM) と国際アーカイブズ会議 (ICA) との共同会議への出席、1983 年からの ADAG による建築図面目録の標準検討 (リバーは 1984 年の第 5 回から出席) 等である。ADAG 参加にあたり「会議に出席するのは、国際的な学者やキュレーター、つまり彼らの肩書きは「チーフ」「ディレクター」「キーパー」などで、この会議に出席して目録作成システムを議論するのは、彼らの部下ではなく彼らである (だから、単なる「代理人」である私は、そんな立場ではないのです!)」と綴っており、議事録 (後述) での発言も目録項目案に対する個別の意見に留まる。

キュレーターの選考結果が公表された「RIBA ニュース」も残されており、1987 年 8 月から任期付きで、1988 年 8 月から任期なしの条件で雇用されたことがわかる。

3-2. 建築図面アドバイザー・グループ

NGA 所蔵の「Records of the Center for Advanced Study in the Visual Arts」を 2022 年 10 月 12 日から 17 日にかけて閲覧した。建築史研究者のヘンリー・ミロンが ADAG の議長を務めたことから、その一部にあたるシリーズ番号 27A3「Henry A. Millon Organizations Files, 1977-2000」に ADAG の記録が残されている。このうち箱 14 のフォルダ 8 と 9 が議事録 (19 回分、1983-1990) であり、箱 14 と箱 26 から 28 には、関係資料として、会議資料ドラフト、事前打ち合わせ資料、書簡等が含まれる。

図面目録の標準を検討した ADAG では、アーカイブズの目録や整理法も検討対象とされた。その議論は四段階にわけられる。**ADAG1~6 (体制の整備)**: グループ小委員会を設置し、集合としてのアーカイバル・グループ (Archival Groups) について検討開始。メンバーは、シェリー・バーク (Sherry Birk)、サラ・ストーン (Sara Stone)、ドロシー・フランクリン (Dorothy A.

Franklin)、ジル・リバー (Jill Lever)。

ADAG7~9 (考え方の提示): 図面を含む多様な建築レコード (Architectural Records) を ADAG の対象に拡張。グループ小委員会内にワシントン DC の検討チームを設置。メンバーは、シェリー・バーク、サラ・ストーン、メイジーン・ダニエルズ (Maygene Daniels)、フォード・ピートロス (Ford Peatross)。バークとダニエルズが、アーカイバル・コミュニティ (Archival Community) からの要望として、アーカイブズ目録に必要な項目や考え方を提示 (「出所」「注記」「利用制限」「アクセス」等)。

ADAG10~16 (目標との齟齬): アーカイブズの考え方と ADAG の目標との齟齬が明らかになった。技術者やデイヴィッド・ベアマン (David Bearman) とのシステム検討の具体化がきっかけであった。

ADAG17~19 (分離の決定): グループ小委員会を中心となり議論されたアーカイブズ戦略 (Archival Strategies) を ADAG における検討事項から分離することになった。

4. 考察

リバーの活動と RIBA 目録とについて、以下のように特徴をまとめることができる。①RIBA の図面目録は司書経験が反映された業務成果であった。②1980 年代以降に電子目録への見識を深めた。③建築図面保存の国際的なネットワーク形成に貢献した。

キュレーターの肩書きを持ちながら①のように司書の経験に依拠してリバーが責務を担ったことは、RIBA のコレクションがいまも図書館学を応用して、図面、手稿、写真等の形態別に建築資料を管理する方針に少なからず影響を与えた可能性がある。大量で多様な記録をアーカイブズとして一様に扱う考え方とは異なるアプローチであり、カード、印刷、電子と目録の媒体が変わっても、RIBA 目録の構成が一貫した方

針を保持した背景にリバーの経験があった。

アーカイブズとの直接の関係としては、リバーは ADAG のグループ小委員会でアーキビストと交流してアーカイブズの考え方に触れたが、今回の調査では RIBA の業務への影響は見られなかった。ADAG 自体としては、少なくとも ADAG18 までは「建築レコード」「建築ドキュメント」を対象として、ガイド提案書では「アーカイブズ」を対象としながらも、1994 年に最終成果として刊行したガイドでは「建築図面」を対象を限定した。もう一点、当初からグループ小委員会はグループをアーカイバル・グループとみなしてアーカイブズの集積的整理の応用を検討したが、最終的にアーカイブズの考え方は ADAG から切り離された。いずれも、目録の電子化にともなう用語の典拠コントロール (Authority Control) を ADAG が重視したためと考えられる。ただし、対象を限定したのは ADAG の目的を明確にするためでしかなく、ADAG で検討された典拠コントロールは、大量で多様なアーカイブズにも応用可能である。

欧米の専門家を招へいして議論の場が設けられたことも ADAG の特筆すべき点である。印刷から電子への目録媒体の変化にともない組織横断型の情報共有が期待されたが、その実現には組織を越えた対話が不可欠であった。つまり②③は連関しており、1980 年代に目録の電子化を計画した RIBA でも、1978 年の北米調査においてリバーは電子目録への関心を明確には示していないものの、1980 年代以降の人的交流は目録の電子化を背景に推進されたと考えられる。

5. 課題と展望——After ADAG

今後は、ADAG 以後の会議出席者の活動を追うことで (After ADAG)、RIBA や ADAG の議論から外されたアーカイブズ整理法の発展プロセスを考察したい。その際

に注目するのは、ADAG グループ小委員会座長のシェリー・バーク、2000 年に ICA が発行した建築レコード手引きで整理 (アーカイブズの編成と記述) の章を執筆したメイジーン・ダニエルズ、ADAG の最終成果物でエディターを務めたロビン・ソーンズ (Robin Thornes) である。いずれも米国で活躍した図面保存の専門家である。あわせて欧州からの ADAG 参加者についても調査して、欧米のアーカイバル・コミュニティとの関係を明らかにしたい。

6. 参考文献等

c) f) は本報告と内容が一部重複する。

6-1. 英国 RIBA 関係

a) *Catalogue of the Drawings Collection of the Royal Institute of British*

Architects, Vol. A, Gregg International Publishers, 1969. 以降の全 20 巻

b) The RIBA Collections, LeJi/1-10, Jill Lever's historical research papers, ca. 1980-1985.

c) 齋藤歩「RIBA 図面コレクション目録をまとめたジル・リバー——北米調査 (1978) とその影響」、日本建築学会 2023 年度大会 学術講演会研究発表、2023 年 9 月 (予定)

6-2. 米国 ADAG 関係

d) Vicki Porter and Robin Thornes, *A Guide to the Description of Architectural Drawings*, G K Hall, 1994.

e) National Gallery of Art, Washington, DC, Gallery Archives. RG27A, Records of the Center for Advanced Study in the Visual Arts, Henry A. Millon Organizations Files, 1977-2000.

f) 齋藤歩「1980 年代米国の「建築図面アドバイザー・グループ ADAG」における国・地域と専門領域の交わり」、日本アーカイブズ学会 2023 年度大会自由論題研究発表、2023 年 4 月 (予定)